

(4) 隅田八幡神社経塚出土鏡について

中川 あや（奈良国立博物館）

本節では隅田八幡神社経塚から多数出土した鏡を通して、本経塚の特色の一面を明らかにすることを試みたい。

各経塚における鏡の構成

第1経塚では、経筒①(3)内から小型経筒(経筒②[7])、経筒蓋(経筒①や小型経筒には伴わないもの[5])、環状部品(4)などと共に4面の鏡が出土した。時期的な内訳は、11~12世紀代の鏡が1面(8)、12世紀代の鏡が1面(9)、13世紀代の鏡が2面(10、11)である。これらの埋納が、第1経塚直上の宝篋印塔造営に伴うものなのか否かについて遺構からの検証は難しいが、宝篋印塔の年紀と最も新しい鏡の年代が近いことを評価すると、宝篋印塔造営と一連の埋納である可能性は十分にある。

第2経塚では、外容器内から3面(39~41)、石組内から6面(37、38、42~45)が出土し、また、経筒(27)の底と蓋(28)にもそれぞれ鏡が用いられていた。石組内での出土位置について明確な記録が残されていないが、出土時の層位と遺構の図面・写真から判断すると、2面(42・43)は北西側、4面(37・38・44・45)は東側に立てかけられた可能性が高い。時期的な内訳は8世紀代の鏡が1面(37)、12世紀代の鏡が8面(38~45)である。大多数の鏡は経巻に記された長寛二年(1164)に近い時期に位置づけられるが、37の海獣葡萄鏡のみ大幅に時期が上がる。また、経筒の底には11世紀末~12世紀前半の素文鏡、蓋には12世紀代中葉から後半の鏡が用いられている。底板と蓋は、埋納直前に経筒身の径に合わせて用意されたと考えて、年代的に大きな矛盾はない。

第3経塚では、石組内から3面(117~119)が出土した。底石の上から出土したものもあるが、当初の遺構の大部分が失われているため、本来の埋納位置は不詳である。時期についてはいずれも12世紀代中葉~後半とまとめがあり、第2経塚と近い時期に造営された可能性がある。117は鉢に紐が通された痕跡があり、元は化粧道具や仏具などとして用いられていたものが、造営に際して埋納されたと推測される。

鏡多数埋納の意義

本経塚の第2経塚では、石組内で6面と、常滑焼外容器内で3面と数多くの鏡が出土した。全国的に、平安時代の経塚への鏡埋納事例は数多く報告されているが、本経塚第2経塚のように鏡の埋納が多数に及ぶ経塚となると一定程度に限られる。数量が多いことによって鏡を納めた意図を汲み取りやすくなるが、例えば、経塚を造営する場に対する辟邪(静岡県堂ヶ谷経塚、広島県宮地川経塚など)、埋經施設における北東(鬼門)に対する辟邪(福井県下黒谷経塚など)、埋經施設の守護(福井県深山寺経塚など)などの意識が窺われる。これらはいずれも外容器外部での鏡埋納であるが、本例のように外容器内に鏡を入れる経塚の他の事例では、石室を設けない場合(京都府塚ヶ谷経塚、和歌山県大藪経塚など)が目立つ。外容器の内外共に鏡を納入するというのは、辟邪の効果を強めたいという意識の表れであるかもしれない。

また、第2経塚の経筒(27)には、底板や蓋(28)に鏡が転用されている。鏡を底板に転用する事例は北部九州に集中し、近畿では少ないことが指摘されている(村木 2003)。

また、蓋に転用する例は全国的にみても少なく、底・蓋とともに鏡の転用という本例は大変珍しい。この経筒（27）の筒身は念入りに研磨され、丁寧に仕上げられていることを考えると、鏡の転用は当初より意図したもので、ここにおいても強力に經典を守護しようという意識が働いたのではないだろうか。16面に及ぶ鏡を埋納した広島県宮地川経塚においても、経筒の底・蓋とともに鏡転用であり（村上 1957）、示唆的である。

以上のように、第2経塚で外容器の内外に鏡を複数納入し、経巻を納める経筒の底・蓋にも鏡が転用されていたのは、経塚造営時に経巻の守護を強く願った意識の表れとみることができる。全国的にみて類例の数少ない注目すべき事例である。

伝世鏡の埋納

第2経塚から出土した鏡の中には、8世紀前半に位置づけられる海獣葡萄鏡が1面（37）含まれていた。経塚の造営年代より4世紀以上も古い時期のものであり、第2経塚の造営時に新たに入手することはかなり困難であったと推測される。飛鳥～奈良時代の鏡は寺院の堂内莊嚴に数多く用いられ（「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」「西大寺資財流記帳」など）、また、神社へ奉納された例もある（千葉県香取神宮、三重県八代神社など）。この海獣葡萄鏡も、元は隅田八幡神社や、経塚造営を担った僧に関わる寺院における伝来鏡で、それが埋納された可能性は十分にあるだろう。実際に、44には懸垂用とみられる孔が穿たれており、かつては堂内などに懸けられていたことを示している。

奈良時代の鏡が、時代を経て経塚に埋納される事例は、千葉県谷津経塚、岡山県マゴロ経塚など数例確認されるが、本経塚の海獣葡萄鏡のように飛鳥時代末～奈良時代前期まで上がる鏡の埋納は類例が少ない。鑄上がりも

非常に良いので、当地のいずれかの寺社等で特別に扱われた鏡であったのではないだろうか。

なお、本経塚に埋納された海獣葡萄鏡は面径6.4cmで、海獣葡萄鏡の中でも小型の部類である。面径が6cm前後の海獣葡萄鏡は、全国的に見ると50例近く出土・伝来している。小型海獣葡萄鏡が海浜（石川県寺家遺跡、三重県八代神社、東京都式根島・野伏西遺跡など）や溝（藤原京右京五条四坊、平城京九条大路など）といった水に関する祭祀の場で多く確認されることについてはすでに指摘がある（杉山 1999）、街道に近接する遺跡（東海道に近接する滋賀県高野遺跡や同東光寺遺跡など）での出土事例を踏まえると、より広く、交通の要衝での祭祀に用いられたと捉えることができる。隅田八幡神社の所在地は、伊勢街道と高野街道が交差し、さらに、紀の川水運の拠点でもあるので、本鏡は当初、そのような交通の要衝における祭祀具として当地へもたらされた可能性があるだろう。

中世的な納経に伴う鏡埋納

本来、経筒は經典を納める容器であるが、第1経塚は、経筒内に鏡を納めた稀有な事例である。ただし、経筒①を外容器として用い、その中に経筒②を納めたとみれば、鏡は小型経筒を用いた埋経の副納品として理解することができる。経筒①は平安時代、経筒②は鎌倉時代以降のものとみられ時期差があるので、周辺の別の経塚すでに納経に用いられていた経筒①が当地の改変などに伴って露出し、外容器として再埋納された可能性が一つ考えられる。納められた銅鏡（8、9）が宝篋印塔の年紀よりも2世紀ほど古いのも、経筒①と同様の理由によるかもしれない。古代の経塚に鏡をはじめとした副納品が伴う事例は数多くあるが、経筒②が埋納された中世においては、経塚造営の意義が変容することもあり副

納品は大幅に減少する。したがって、第1経塚の納経の作法は特殊な事例と評価することができる。

なお、第1経塚の築造が宝篋印塔の造営と一連であるかどうかは重要な問題である。発掘調査成果からは明らかにしがたいため、経塚と石塔造営が関連する事例を参考を見ておきたい。愛媛県西予市松渓経塚では、「徳治三年」(1308)の紀年銘のある銅製経筒2口、外容器の破片、土師器、銅錢などが出土した。合わせて大小2基の五輪塔が発見され、造営目的は死者の供養とされる(三宅 1972)。また、群馬県前橋市小鳥が島経塚は赤城神社内に造営された経塚で、石造多宝塔の地中から銅経筒の残欠と平安末~南北朝期の鏡10面が出土している。赤城神への信仰と法華経納経にかかわる経塚造営とが結びついた事例とされる(今井 1974)。これらの事例を踏まえると、隅田八幡神社境内における宝篋印塔造営と第1経塚における納経を一連のものとして結び付ける余地があるように思う。

以上、出土鏡を切り口として、隅田八幡神社経塚の特色を浮き彫りにしてみた。古代末期に築かれた第2経塚では、複数の鏡を各所

に効果的に配置して經典の守護を強く図った様子が窺われた。中世に築かれた第1経塚では、鏡の埋納という古代的な要素を残した納経のあり方が確認されたとともに、その指標としての石塔造営の可能性をうかがうことができた。それぞれが古代、中世の経塚の稀有な一例として評価されるとともに、これらが近接して営まれているという、古代から中世にかけての信仰の場の連続性も重要と考える。

謝辞 成稿にあたり、久保智康氏(京都国立博物館名誉館員)には様々な視座を賜りました。厚く感謝申し上げます。

主要参考文献

- 今井善一郎 1974『赤城の神』煥乎堂
杉山洋 1999『古代の鏡』日本の美術 393、至文堂
三宅敏之 1972「愛媛県松渓経塚について」『MUSEUM』No251、東京国立博物館
村上正名 1957「安芸国本郷町経塚報告」『考古学雑誌』第42巻4号、日本考古学会
村木二郎 2003「経塚に埋納された鏡」『鏡にうつしだされた東アジアと日本』ミネルヴァ書房